

来日迫る!  
フランクフルト放送交響楽団

ウィーン交響楽団音楽監督就任(2021/2022シーズンより!)  
欧州楽壇の“出世街道”をひたすら突き進む!!

# アンドレス・オロスコ=エストラダ

## Andrés Orozco-Estrada

2021/2022シーズンから、ウィーン交響楽団の音楽監督就任が発表されたオロスコ=エストラダが  
手兵フランクフルト放送交響楽団を率い、6月に日本公演を行います。多忙を極めるマエストロにインタビューに答えていただきました。



© Martin Sigmund

■今回の選曲は主にどのような意図によるものですか。また、プログラムに込められたメッセージは何ですか。

—私たちは今回のツアーで2曲の交響曲を演奏します。ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」とマーラーの交響曲第5番で、いずれも大変有名です。これらの作品については多くを語る事ができますし、誰もがとてよく知っているとします。しかし、ここでは、私が注目しているいくつかの点について話しましょう。最初にドヴォルザークの第9番ですが、個人的には、これは非常に美しい曲だと思えます。作品中には、良い意味で、とても親しみやすい旋律が溢れているので、誰もがこの曲をどこかで耳にしたことがあるような、懐かしさを感じることが出来ます。また、旋律の多くは、皆さんも口ずさむことが出来ます。こうした点こそ、私がいちばん大変好ましく思っていることなのです。そして、私たちは、この作品を演奏できること、つまり、作品のテーマや数々の旋律を聴衆の皆さんの前で演奏できることに、大きな喜びを感じます。ドヴォルザークの音楽は、中央ヨーロッパと密接な関係があります。というのは、彼がブラームスと頻りに接触していたからなのですが、ドヴォル

ザークの作品中には、ある意味、彼独自の音楽で表現したブラームスの深い響きを感じられると思います。交響曲第9番は、コントラストや美しさが一杯詰まった素晴らしい作品です。一方、グスタフ・マーラーの交響曲第5番は、ドヴォルザークの第9番とは非常に対照的な作品です。とはいえ、マーラー自身もボヘミア地方出身であるという点については、偶然にもドヴォルザークの交響曲と関連があるのですが、マーラーの交響曲第5番は、とてもドラマチックで、作品中には愛の音楽がたくさん盛り込まれています。例えば、弦楽器とハープによるアダージェットはアルマへの愛を表したものです。第1楽章は非常にドラマチックな構成で、まず冒頭に第1トランペットのソロが奏でられます。また、素晴らしいスケルツォには、ソロのような高い演奏技術を要する部分がいくつもありました。そして大変興味深い最終楽章は、とても古典的に聞こえる曲中に知的なユーモアが満載されています。私の見解では、この交響曲には4つの異なるムードがあり、それがこの作品をこれほど興味深くしているのだと思います。フランクフルト放送交響楽団はマーラーの演奏では非常に長い伝統を持っているので、私たちはこの作品を日本で演奏する素晴らしい機会を得られたことを大変嬉しく思っています。

■マエストロは世界の名高いオーケストラの数々と共演していますが、フランクフルト放送交響楽団の特徴、あるいは魅力は何ですか。

—魅力というのは、フランクフルト放送交響楽団のサウンドについて語る上で一番大切な部分ですが、それは何かと問われたら、2つの点を挙げたいと思います。まず第一に、情熱です。団員たちは、どの演奏会でも、大変な熱意を持って、精魂を込めて演奏します。しかし、同時に、彼らは技術面についても常に最高のレベルを目指しています。そのため、聴衆の皆さんは、完璧な技術に裏付けられた極上のサウンドと、聴き手を音楽の世界に引き込む情熱を併せ持つことができます。団員はいつも音楽にとて深く関わっているのです。もう一つの魅力は、柔軟性です。今回、皆さんがドヴォルザークの交響曲とマーラーの交響曲を聴き比べてみれば、それぞれが、全く違うスタイルで演奏されていることが分かると思います。フランクフルト放送交響楽団のサウンドからは、それぞれの

曲調の違いを容易に感じ取ることができるとでしょう。■2015年フランクフルト放送交響楽団とのツアーから2年半ぶりの来日ですが、日本で楽しみにしていることはありますか？

—日本にはこれまでに2回来たことがありますが、いずれも指揮をするために来ました。日本には素晴らしい聴衆の皆さんがいますし、素晴らしいホールもあるので、私は日本が大好きです。しかし過去2回の来日の際には、私は仕事に追われていたので、日本の色々な都市や、日本という国について、あまり詳しく知る機会がありませんでした。それでも私には二つ知ることがあります。日本の聴衆の皆さんが音楽に対して真摯であるということ、つまり、日本の皆さんは、興味を持って、本当に熱心に耳を傾け、心から音楽を鑑賞してくれているのです。これはとても有り難いことです。日本人の暮らし方にも、私は大変興味をそそられました。というのは、日本には皆さんの極めて近代的なものと、伝統的で歴史と関わりが深いものがあり、それらが混在しているのを目にしたからです。特に、日本人の物腰や言葉のやり取りからは、お互いが相手をとて敬っていることが感じられます。また、私が出会った人たちは、とても寛大であると同時にとても親切でした。日本で演奏したり初めての場所を訪れたりする時に、私がいかに、そして、いかにして自分と人々と交流するかということ、私は主に人々に、つまり、その人の人間性や性格といったものに対して興味を持っています。ですから、日本で人々と知り合うことは、私にはとても意義のあることなのです。

■今回のツアーに際し、日本の皆さんへのメッセージをお願いします。

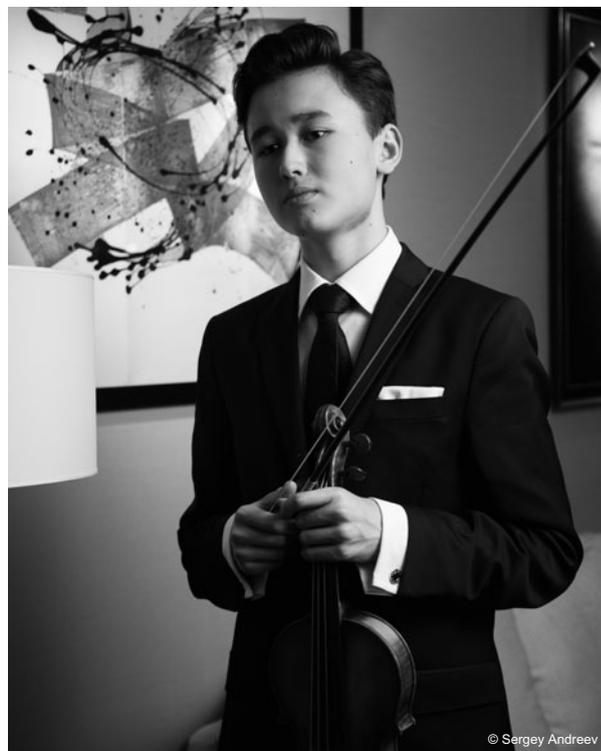
—最後になりましたが、日本の皆さんには、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。再び日本にお招きいただき、本当に有り難うございます。私たちが皆さんに素晴らしい音楽と皆さんの感動をお届けできることを、そして皆さんが至極のコンサートを満喫されることを祈っています。私たち一同はツアー開始をとて楽しみにしています。

インタビュー協力：關智子(ライター)

水晶のごとき、輝きを放つ新星ダニエル・ロザコヴィッチ

# 7つの民族の血を受け継ぎ、4カ国語を操る若き逸材。 9歳から親しんでいるメンデルスゾーンの コンチェルトで真価発揮

伊熊 よし子 (音楽ジャーナリスト)



© Sergey Andreev

ウラディミール・スピヴァコフ、ワレリー・ゲルギエフ、アンドリス・ネルソンスをはじめ、多くの世界的な指揮者から「真の天才」と称されるダニエル・ロザコヴィッチは、7歳になる少し前に自分の意志でヴァイオリンを始めた。家族に音楽家はひとりもおらず、ロザコヴィッチも母親の希望で5歳からチェスを習い、ストックホルムの大会で第2位となり、関係者から「未来の名人出現」と称された。当時はロシアのテニス選手、マラト・サフィンの大ファンだった母親の薦めによりテニスも習い、12歳の子に勝つほどの腕前だった。

「でも、ぼくは学校でヴァイオリンに出会い、一瞬にしてその音色に魅せられてしまったんです。ヴァイオリンだったら90歳まで弾ける。スポーツは30代で引退しなければならぬ。絶対にヴァイオリニストになると、7歳前に自分の将来を決めました。以後、迷いはありません。さまざまな指揮者からいろんなことを学び、レパートリーが増えていくたびに胸が高鳴ります。音楽で自分を表現できるので」

ロザコヴィッチは幼いころから先生探しに苦労した。自分の音楽観と合う先生になかなか巡り合えなかったからだ。だが、カールスルーエ音楽大学のヨーゼフ・リッシン、さらにエドワード・ウルフソンの

教授と出会い、現在はこのふたりから非常に意義深いレッスンを受けている。そしてジュネーヴのインターナショナルスクールにも通い、学科も学んでいる。

「ぼくの家族はいろんな民族が混じっていて、ぼく自身は7つの民族の血を受け継いでいます。それはいろんな作曲家の作品を学ぶときにとても役立ちます。言語にも興味があり、いまは4カ国語を話せますが、もっと増やしていきたい。言語が理解できると、作曲家に近づくことができると思うからです」

ヴァイオリンを始めて2カ月後に初めてのリサイタルを行い、1年半後にはスピヴァコフとの共演でタイスの「瞑想曲」を演奏した。

「マエストロ・スピヴァコフが、ぼくのヴァイオリニストとしての道を拓いてくれたのです」

そのころからメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲には憧れていたが、実際に演奏したのは10歳のとき。ロマンにあふれ、繊細で奥深い曲想に深い共感を抱くようになる。

「メンデルスゾーンのコンチェルトは子どもにとっても理解しやすい曲でした。旋律が美しく、自然に入っていきますが、いまはもつと楽譜の奥まで読み込み、その深さを表現したい。マエストロ・オロスコエストラダとは初共演ですので、すごく楽しみです」

エキゾチックな風貌と、知的で深々とした表現の演奏。共演した指揮者がみな絶賛し、支援を惜しまないのは、素直な性格も関係している。「スポーツをしないと頭がスッキリしない」と語る彼は、テニス、サッカー、ボクシングに加え、最近では柔道も始めた。なんでもとことん極め、自分のものにしてしまうロザコヴィッチ。「でも、ヴァイオリンが一番。生涯、ぼくはヴァイオリンとともにありたい」と熱く語る。その心意気を演奏から受けとりた。

富士通コンサートシリーズ アンドレス・オロスコエストラダ 音楽監督・指揮

## フランクフルト放送交響楽団

2018年6月9日(土) 19:00開演 (18:20 開場 / 終演予定 21:00)

ミューザ川崎シンフォニーホール

ワーグナー: 歌劇「リエンツィ」序曲

メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲 小短調Op.64

ダニエル・ロザコヴィッチ(ヴァイオリン) Daniel Lozakovich, Violin

ドヴォルザーク: 交響曲 第9番 小短調Op.95「新世界より」

【チケット料金】

S¥16,000 A¥14,000 B¥11,000  
C¥8,000 D売切

【ジャパン・アーツ夢倶楽部会員料金】

S¥15,000 A¥13,000 B¥10,000  
C¥7,200 D売切

\* 料金には消費税8%が含まれております。

2018年6月14日(木)

19:00開演 (18:20 開場 / 終演予定 21:15)

サントリーホール

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第2番 小短調Op.18  
チョ・ソンジン(ピアノ) Seong-Jin Cho, Piano

マーラー: 交響曲第5番 嬰小短調

【チケット料金】S~D売切

協力: ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)(川崎公演のみ) マネジメント: 神奈川芸術協会(川崎公演のみ) 主催: 日本経済新聞社/ジャパン・アーツ 後援: ドイツ連邦共和国大使館 協賛: 富士通株式会社

■2018年日本公演スケジュール

6月8日(金) 群馬県太田市市民会館 太田市民会館 0276-57-8577 ☆

6月10日(日) 静岡グランシップ グランシップ チケットセンター 054-289-9000 ☆

6月11日(月) 日本特殊陶業市民会館 CBCテレビ事業部 052-241-8118 ☆

6月13日(水) フェスティバルホール フェスティバルホール 06-6231-2221 ☆

6月15日(金) ハーモニーホールふくい ハーモニーホールふくいチケットセンター

0776-38-8282 ☆

【★ロザコヴィッチ、☆ソングン】